

李喬『結義西来庵』における「抗日」表象の重層性 —1970年代官製文学の中での抵抗と台湾意識の再編成—

明田川聡士

はじめに

- 第1節 李喬と西来庵事件
 - 第2節 官製文学としての『結義西来庵』
 - 第3節 「抗日」表象の中華民族意識への接続
 - 第4節 『結義西来庵』と台湾意識の再編成
- おわりに

(要約)

李喬が弱者の抵抗を描く作品に『結義西来庵』(1977年)がある。同作は、日本統治期の抗日武装蜂起「西来庵事件」での事件指導者を伝記的に描いた書き下ろし長篇小説であり、実質的には政府刊行物である『近代中国叢書・先烈先賢伝記叢刊』の1冊として刊行された。本稿では、同作で記録として描写される西来庵事件という抗日武装蜂起の物語を解説し、作中では如何に台湾人の「抗日」表象が重層化しているのか、李喬自身のアイデンティティ再編成の過程や1970年代当時の台湾社会の変容、特に台湾基督長老教会による一連の政治的行動の影響を参照しながら考察したい。

はじめに

葉石濤『台湾文学史綱』は、日本統治期台湾新文学の台湾人作家による「抵抗」精神を認め、植民地統治下の様々な社会的背景と連動した反帝国・反封建の写実主義的作風こそが、当時の大きな文学的特徴であったとする¹。一方、陳芳明『台湾新文学史』では、台湾新文学の「抵抗」精神が「戦後」台湾人作家の創作に対しても影響を与えたことを指摘する²。1960年代以降に台湾文壇で活躍する李喬(1934年～)³も同様に、台湾の政治や社会に対する文学を通じた抵抗を模索してきた。李喬は台湾新文学での創作活動とは、被植民者の苦悶や鬱憤を表現するための手段であったと見なし⁴、さらに自身でも代表作『寒夜』三部作(1979～81年)や「小説」(1982年)、『藍彩霞の春天』(1985年)などの諸作品で、絶対的権威や伝統的陋習に抗い奮闘する台湾人の姿を描いてきた。

このように李喬が弱者の抵抗を描いた創作の1つに、1977年10月25日に出版された『結義西来庵』(以下『西来庵』と略す)がある⁵。『西来庵』は、1915年に起きた日本統治期の漢人による最後にして最大の抗日武装蜂起「西来庵事件」を描いた書き下ろし長篇伝記文学であり、李喬が「李能棋」という自身の本名で発表した作品でもある。後述の如く、『西来庵』は当時の蔣経国行政院長の号令で編纂された『近代中国叢書・先烈先賢伝記叢刊』(以下『伝記叢刊』と略す)の1冊であり、言わば典型的な官製文学の政府刊行物として出版された。ただし、後に李喬自身が、同作は「私の一生に対して決定的な影響を生んだ」⁶と語ったように、そこでの創作経験は台湾近現代史にモチーフを求めた「歴史素材小説」を中心とする、李喬自身の創作姿勢にも大き

な影響を与えていた⁷。

だが、李喬が『西来庵』自序で「〔同作では創作を——筆者〕フィクションをもって処理することはもはや忍び難く、その勇氣も失われ、如何ともできなかつた」⁸と記し、官製文学という枠組みの中で抗日武装蜂起の事跡を記録として描いているためか、同作は「李喬の第1作目の歴史小説」⁹と見なされながらも、従来十分に考察されることは稀であった。李喬作品と作家像を詳細に紹介する許素蘭『給大地作家書——李喬——』でさえも、「文学的完成度から言えば、『結義西来庵』は後の『寒夜三部作』と『埋冤・1947・埋冤』とは比べものにならない」が、「その後『寒夜三部作』を創作するには大きな助けになった」と評価するに留まる¹⁰。ただ、こうして李能棋という本名で出版された『西来庵』が、李喬研究の襞の中に隠れるように見落とされたことは決して偶然ではなかつた。後述のように『伝記叢刊』では、李喬のほかにも鍾肇政や朱西甯など著名な台湾人作家も創作に関与していたが、これまでの台湾文学研究では鍾・朱両氏による同叢書中の作品が注目されたことは皆無であったし、そもそも『伝記叢刊』の存在自体が無視されてきたとも言える。前述の葉・陳両氏による著作をはじめとする従来の「台湾文学史」では、『伝記叢刊』については一切論述されていないのだ¹¹。

ただし、台湾で1960年代初頭に伝記雑誌『伝記文学』を創刊した劉紹唐が証言するように、「伝記文学とは史学及び文学と密接な関係を持ち」ながら、「それ自体の特徴と重要性」を備えた文学ジャンルであるとも言えた¹²。伝記文学が純粋な小説創作でないことを理由に、作品自体を看過することはできまい。しかも「伝記作家が誰かの伝記を執筆する時、ある種の主観的色彩を帯びることは免れがたい」¹³と劉が言うように、伝記文学では作者が機械的に事実の断片を繋ぎ合わせて創作するわけではなかつた。そこには作者自身が作品に秘めた創作上の仕掛けさえも垣間見えることだろう。本稿では、従来ほとんど議論されなかつた『西来庵』に焦点を当てる。『西来庵』で記録として描写される西来庵事件での抗日武装蜂起の物語を解説し、同作では如何に台湾人による「抗日」表象が重層化しているのか、李喬自身のアイデンティティ再編成の過程や1970年代当時の台湾社会の変容を参照しながら考察してみたい¹⁴。

第1節 李喬と西来庵事件

西来庵事件とは、首謀者の余清芳（1879～1916年）が1915年に起こした抗日武装蜂起であり、余清芳事件とも呼ぶ¹⁵。当時、台南市街には西来庵という廟宇があり、余や同じく抗日思想を抱く羅俊（1855～1915年）、江定（1866～1916年）らが蜂起を謀る密議の場となっていた¹⁶。西来庵での謀議が検挙された後、余らは台南山間部の噍吧哖（タパニー、現台南市玉井区）一帯に潜伏し、日本人官憲を相手に激しいゲリラ闘争を展開した。その際に総督府が制圧のために多数の地元住民に対しても無差別虐殺を加えたために、別に噍吧哖事件（タパニー事件）とも呼ばれる¹⁷。一説によれば、同事件に参加した義民数は10,000人に達し、烈士者は3,000人、無辜の女性や子供も3,000人超が犠牲になったという¹⁸。事件後、被告人として逮捕・起訴された者は1,957名に上り、そのうち866名に死刑、453名に懲役刑が下された¹⁹。「世界の裁判史上にない残酷

な記録」²⁰となった判決は、台湾人を戦慄させ、内地社会にも大きな衝撃を与えた²¹。武者小路実篤は文芸誌『白樺』に掲載した随筆文「八百人の死刑」(1915年)で、「自分は新聞を見てみてふと欄外に台湾の土人が八百人程死刑になることを読んだ。随分ひどいと思つた」、「数百人を死刑に処して平気でみられる人間の顔が見たい気がする。数百人の裁判が一寸の間に完全に行はれると云ふことは誰が信じられやう」と判決に疑念を呈し、「人道上の問題だ。どうにかしてやつて彼等を死の恐怖から助けることは出来ないだらうか。出来ないと云ふのは日本の恥ぢではないだらうか」と総督府の姿勢を非難した²²。西来庵事件は植民地統治期における抗日運動の分水嶺となり、事件後はそれまで続いた武装抵抗が杜絶し、台湾議会設置請願運動や文化協会の啓蒙活動に代表されるように、台湾人知識人が主導する合法的な抵抗運動へと変わっていったのである。

周婉窈によれば、西来庵事件をめぐる言説は霧社事件よりも相対的に少なく、事件自体が中国では伝統的な下層階級による易姓革命であることも理由となり、現在では同事件は人々に忘れられてしまった感が強いという²³。だが、西来庵事件発生当時、台南の新化公学校に通っていた楊逵(1905～85年)は、当局の軍隊出動の様子を目撃し、実兄も軍夫として徴用されたために、同事件は一生涯記憶に残る印象深い出来事となったと証言している²⁴。同時代的に西来庵事件を直接経験した楊逵にとって、それは自らの政治的・文学的原点となる重大な歴史であり、発生から70年近く経過した後でも決して忘却の彼方に置き去りにすることはできなかったのだ²⁵。一方、『西来庵』が発表された1970年代末当時の台湾社会でも、同事件は依然として台湾人の記憶に残る歴史的イベントであり続けた。例えば、『中国時報』(1976年10月25日)では、光復節前夜を記念して台湾省文献委員会が噶吧哖の山中で開催した「台湾史跡研究会」の様態を報道しているが、同記事では余ら義民の抵抗を「正義のために身を犠牲にした凄惨な壮挙」²⁶と讃えている。また、台南県政府(当時)は同事件の烈士者を顕彰するために、1977年4月に台南県南化郷(現台南市南化区)で「噶吧哖起義抗日烈士紀念碑」及び「抗日義士忠魂塔」を建設し、1981年5月には台南県玉井郷(現台南市玉井区)に「抗日烈士余清芳紀念碑」を設置してもいた²⁷。1970年代末の社会的コンテクストにおいて、西来庵事件とは「日本人が台湾同胞を追い立てて大いに肆に虐殺したことで名高い」²⁸歴史的イベントであったのだ²⁹。

ところで、1934年生まれの李喬は、楊逵のように西来庵事件を同時代的に経験したわけではない。ただし、李喬は抗日左派の活動家として知られていた父親の李木芳から、幼少の頃より同事件の詳細について繰り返し聞かされて育ち、事件の顛末は李喬自身に強烈な印象を残したという³⁰。このように李喬は父親の影響から西来庵事件を間接的に知り得たのだが、同事件に対する関心は非常に高かった。それ故に李喬は現在まで半世紀以上続く創作活動の中でも、「早くからその題材〔西来庵事件を指す—筆者〕を探り、小説に書こうという意欲」³¹に溢れていたと言える。例えば、1972年に『中華日報』で発表した「流転」では、同事件での当局の住民に対する虐殺が挿話的に語られ、台湾人の怨念が彷徨しながら日本人への復讐を果たしていく様子が描かれている³²。李喬は同事件について『西来庵』の創作以前より関心を寄せていたのであり、余が率いた抗日武装蜂起を「台湾の抗日史上、とりわけ特別な意味のある」、「最も意義深い偉大な

革命行為」として捉えていた³³。こうして西来庵事件は李喬にとって恰好の文学的題材となり、自身の創作活動に「決定的な影響を生んだ」という『西来庵』の下地となったのである。

第2節 官製文学としての『結義西来庵』

『西来庵』は、1977年10月25日に台北の近代中国出版社より『伝記叢刊』の1冊として出版された。「先烈先賢伝記叢刊」という叢書タイトル及び台湾光復節と重なる出版日からも、同書出版の政治性が容易に察し得るが、そもそも『伝記叢刊』は国民党中央委員会党史会（以下、党史会と略す）の出版計画による官的色彩の強い刊行物であった。版元は党史会所属の出版社であり³⁴、党中央がこの年の光復節祝賀を前に鍾肇政をはじめとする10名の台湾人作家や大学教員を招聘し、台湾の歴史に貢献した台湾人に関する伝記叢書を刊行させた³⁵。この時『伝記叢刊』として取り上げられたのは、丘逢甲、姜紹祖、連雅堂、蔡惠如、羅福星、翁俊明、丘念台、黃朝琴ら8名の台湾知識人・抗日運動家、そして西来庵事件と霧社事件という2件の日本統治期における代表的抗日事件である³⁶。台湾にゆかりのある歴史的人物を選定し、「近代中国叢書」として伝記化することは、1970年代に「中華民国台湾化」を推進していた蔣経国の「文化建設」や国民党の文芸政策の変化との関係もうかがえる³⁷。後に李喬が証言したように、『伝記叢刊』は当時の蔣経国行政院長の号令のもとで開始された出版事業でもあった³⁸。1977年1月に党史会主任委員の秦孝儀は、前述の10名の作者を一斉に招聘して執筆に取りかからせ³⁹、この時に創作された『伝記叢刊』の一部は早くも同年10月には書籍化された。当時の台湾読書市場では、欧米の著名人に関する伝記の翻訳が圧倒的多数を占めており⁴⁰、台湾の郷土と関係の深い人物が最初に伝記化されたのは、羅福星没後60年を記念して1974年に出版された羅秋昭『羅福星伝』⁴¹であったという⁴²。その後まもなく、前述のように台湾人の事績を取り上げた『伝記叢刊』が登場し、以後1990年代半ばに至るまで、同叢書は3ヵ月に1冊のペースで10数年にわたり継続的に刊行された⁴³。その結果『伝記叢刊』は、1980年代以降に台湾で突如出現した「伝記文壇」を席捲したのであった⁴⁴。ただし、1980年代に入り『伝記叢刊』が「民国初年の〔中国—筆者〕大陸での革命烈士を描き始める」と、台湾人読者には馴染みの薄い「これまでに聞いたことも無い革命烈士が主人公となり」、同叢書の志向性は大きく変わり、一般読者には歓迎されなくなった⁴⁵。それ故に『西来庵』とは、台湾「伝記文壇」で台湾人を描く数少ない伝記文学の1つと言えた。

『西来庵』の梗概は、次の通りである。1915年の陰暦3月、迎神の儀が行われる西来庵近隣には余の精米店があり、その地下室では羅や江ら多くの男たちが台湾各地から集結していた。やがて彼らは西来庵に移動し、主神の五福大帝の例祭日に決起することを誓い、王爺の前で義兄弟の契りを結ぶ。そして余と江は台湾南部で、羅は北中部で決起の準備を始めるが、彼らの行動は当局に探知され、同年6月には警察の捜査が台湾全島へ及んだ。羅を含む200人以上の同志が逮捕されると、摘発を逃れた義民たちは噍吧嘰の山中へ逃げ込む。こうして余は山中で仲間を従えながら、自身を大元帥とする「大明慈悲国」を打ち立て、逆に派出所や駐在所を急襲しては日本人

官憲と家族らを殺害していった。そのため噍吧哖では、制圧のために陸軍と警察の大部隊が投入され、同年8月には日本統治期の「抗日革命事件の中で、最も大きく、壮烈で、悲壮な一戦」が終わる。物語の結末では、多数の一般人が惨殺された事実が伝えられると同時に、台南の臨時法院での判決内容が叙述され、西来庵事件の首謀者たる余が処刑されるまでを描いていく。

前述のように、李喬は早くから西来庵事件についての関心が高く、事件に係わる小説を執筆する意欲も旺盛であり、『伝記叢刊』の出版計画が持ち上がる前から題材の収集を始めていた。当時台湾では台湾省文献委員会が、総督府の公文書である『台湾総督府公文類纂』を中国語訳して編纂した『余清芳抗日革命案全档』（以下『革命全档』と略す）を刊行していた⁴⁶。後に『革命全档』の編纂者である程大学は、その内容をもとに西来庵事件について「最も完備した専門書」⁴⁷と称される『台湾先賢先烈專輯——余清芳伝——』（以下『余伝』と略す）を出版している⁴⁸。李喬は『余伝』の典拠ともなった『革命全档』を中心に、同事件に関する資料を収集した一方で、『伝記叢刊』の作者として招聘に応じた後は自ら古戦場となった台湾南部にも出向き、事件の生存者や遺族を含む関係者にインタビューを繰り返しては口述記録を取った⁴⁹。『西来庵』は脱稿まで2年6ヵ月に及ぶ周到な取材期間を経て創作され⁵⁰、民衆の口証から余の婚姻状況を明らかにするなど、先行資料には記述のない事実にも多く言及している⁵¹。こうして李喬は、自ら収集した複数の資料を駆使して、西来庵事件の顛末を歴史的事実に即した物語として叙述しようと試みたのであった。

ところで、1977年から91年まで刊行され続けた『伝記叢刊』の諸作品については、出版後に書評等で論評されることは極めて稀であった。著名作家の作品では、鍾肇政『丹心耿耿屬斯人——姜紹祖伝——』⁵²（『まっすぐな忠誠心といえばこの人なり——姜紹祖伝——』）、朱西甯『表率群倫の林子超先生——林森伝——』⁵³（『社会に模範を示す林子超先生——林森伝——』）などが挙げられるが、いずれの作品も出版後の反響はなかった。これはまさに劉紹唐が言うように、従来「真に文学研究に従事する者は」、「伝記文学が真の文学であると認めなかった」からであろう⁵⁴。前述の如く、葉や陳ら複数の文学史家が『伝記叢刊』を「台湾文学史」の中に位置付けてこなかったという事実は、劉の証言を裏付けるものと言えるのかもしれない。ただし、『西来庵』は当初こそ反響が皆無であったが、彭瑞金「読『結義西来庵』」『民衆日報』（1978年10月21日）を始め、丘秀芷「結義西来庵——噍吧哖事件——」『中央日報』（1978年10月25日）、沈明進「評李喬的『結義西来庵』」『中央日報』（1979年3月4日）、花村「談李喬『結義西来庵』一書裏調子的運用」『中外文学』（1979年10月）など、刊行の翌年以降に、同作をめぐる論評の発表が集中している。興味深いのは、沈や花村の評論題目からもうかがえるように、この時点で『西来庵』はすでに「李喬」の作品として見なされていた点である。「李能棋」という本名で出版された『西来庵』には、作者紹介に関する記載さえ見られなかったが⁵⁵、確かに『西来庵』は出版の翌年には「李喬」の作品として認知されたのである。李喬は1978年1月から『台湾文芸』で『寒夜』三部作の第一部「寒夜」を連載し、同年4月には『民衆日報』でも同三部作の第三部「孤灯」を連載しており、『西来庵』は『寒夜』の作者が描き出すもう1つの「[台湾の——筆者] 歴史を背景に書かれた小説」⁵⁶として期待されたのであった。そのため必然的に『西来庵』をめぐる文学的評価は、作中

での歴史描写の問題に集中した。花村は前述の論評で、次のように論じている。

この本は確かにきちんと周到に余清芳、羅俊、江定らの不遇や行動を描き出し、侵略者に制圧された一般庶民が感じた心情を描写している。また噍吧哞事件の発端と結末、それが台湾50年の占領期において持つ歴史的意義も概括している⁵⁷。

花村は、作者が義民の様子と植民地統治下での台湾人の心境を活写し、西来庵事件の歴史的意義さえも詳細に描き出した点に注目し、「内容の面では、他人に容喙させる余地はどこにも無い」⁵⁸と高く評価した。こうした歴史描写に関しては、沈も同様に「〔物語は—筆者〕縦の方向では事件の一部始終を詳しく論述し、横の方向では烈士者となった組織の諸成員の心情を代弁している」⁵⁹と好意的に批評する。『西来庵』と同時期に『伝記叢刊』での創作に関与した丘秀芷によれば⁶⁰、同作は「完全に史実に基づき、虚構のひとかけらもない」⁶¹描き方であるという。このように官製文学として誕生した『西来庵』は、作品の発表当初から西来庵事件の全貌を史実に即して克明に描く「大型のルポルタージュ」⁶²として認識されていたのであった⁶³。

第3節 「抗日」表象の中華民族意識への接続

1. 歴史描写の偏重性

一般的に、伝記文学は叙述対象の偉人を必要以上に美化し、特定のシンボル像を産み出す傾向が強いと言われるが⁶⁴、党史会による『伝記叢刊』もこのような伝記文学の典型例であった。官製文学である『伝記叢刊』は、作中の主人公が党への忠誠を誓い、国家を愛し、中央を擁護する姿勢を強く見せている⁶⁵。それでは『西来庵』では、物語で体現される政治性は如何に表現されているのだろうか。前節で述べたように、花村は『西来庵』の物語内容を肯定的に評価していたが、その一方で「形式の面では、議論すべきところがかなりはつきりしている」⁶⁶と次のように論評してもいた。

作者は羅俊に対してできるだけ詳細に書き、あろうことか全体の3分の1余りの紙幅を占めている。だが噍吧哞事件は何千何万という人が起こした事件だ。それに情況と理屈から言えば、本当の発起人と指導者は、確かに余清芳だ。余清芳のいた西来庵は革命運動の揺籃の地である。余清芳を首謀に、江定や羅俊へ連絡が回ったのだ。余清芳は義軍統領の大元帥であり、彼によって檄文が飛ばされ、天下に告げられた。それ故、噍吧哞事件の進展から言えば、主題は余清芳をめぐるべきでありそうしてこそ完璧であると見なせよう⁶⁷。

花村は『西来庵』で羅の描写が「全体の3分の1余りの紙幅を占めている」点を指摘し、西来庵事件で余が「義軍統領の大元帥」として行動した史実に鑑みれば、物語の多くで余を描かずに羅に焦点を当てることは主題から外れていると批判した。『西来庵』については、事件の全貌が

活写されているという評価の一方で、描写内容に偏重が見られるとも指摘されていたのだ。

前述のように、羅とは余とともに抗日武装蜂起を主導した義民統領の1人である⁶⁸。羅は幼少より書房に通い、総督府の始政開始直後には、抗日分子の掃討を目的として台湾人紳商が当局に設置を求めた「反民族的な買弁家的組織」⁶⁹の保良局で書記をつとめた。だが、羅はまもなく抗日運動へ加わり、決起が失敗すると密かに対岸の華南地方へ渡り身を潜める。そこで羅は日本の植民地支配に抵抗して中国大陸の原籍へ戻った数多くの台湾人と出会い、自身でも辛亥革命を目の当たりにすることで台湾の解放を願うようになった。そして余の蜂起計画を知ると、羅は中国大陸から台湾へ戻り西来庵を訪ね、余と義兄弟の契りを結び、西来庵事件を引き起こす。李喬は『西来庵』で、抗日決起に失敗し台湾と中国大陸のあいだを行き来する羅の姿を描いたが、興味深いのは、物語の中で幾度も叙述される羅の視線を通して見た清末中国の様子である。

頼秀〔羅の偽名—筆者〕、47歳。彼は「台湾の名医」、それに加えて「台湾の名士」という肩書きでもって、〔医者としての—筆者〕技量を持ちながら各地をさすらい、世間をわたり歩いた。以後7年のあいだ、彼は福建や浙江、広東、広西を歴遊し、嶺南各地の古刹や名所、海岸沿いや内陸の要所で、政情や風習、人々が生活に苦しむ姿を黙々と目にした。彼の心中が悲愴感で溢れていたのは、彼が熱血漢であったためだが、この時の祖国大陸ではまさに義和団事件が勃発し、8カ国連合軍の騒乱を引き起こし、続いて日露戦争が開戦し、我が東北の辺地が戦場と化したためでもあった。清朝政府の腐敗は、もはや完全に露呈していた。祖国大陸も、同様に列強による領土の蚕食と併呑の局面に立たされていたのである。

ただ1905年、光緒31年、孫中山先生が結成を企てた革命団体—中国同盟会が、凍てつく寒さの、長い長い夜が続く祖国に、一筋の希望をもたらしたのだ⁷⁰。

『西来庵』では清末中国の荒んだ状況と、その時代に孫文が結成した中国同盟会に対する期待の双方が描き出される。日本統治下の台湾と同様、清末中国も「同様に列強による領土の蚕食と併呑の局面に立たされていた」のであり、孫文の中国同盟会の誕生こそが「長い長い夜が続く祖国に、一筋の希望をもたらした」。そして目覚めた羅の抗日意識は、辛亥革命後の中華民国の誕生により、台湾解放に向けた大きな期待へと変わっていく。

最も彼〔羅—筆者〕を奮い立たせたのは、1911年（宣統3年）10月10日に、孫中山先生の率いる革命軍が武昌で決起し、清朝を倒し、中華民国が誕生したことである。……中華民国の誕生こそが彼に無限の希望と鼓舞をもたらした⁷¹。

列強に蹂躪された台湾と「祖国」の現状に失望した羅に、「無限の希望と鼓舞をもたらした」のは、孫文が導く革命軍による破竹の進撃であり、「中華民国の誕生」であった。『西来庵』では、中華民国の建国こそが台湾を日本の植民地統治から解放する最大の原動力として描かれていく。もっとも周知の通り、武昌蜂起は中国各地の革命軍による蜂起に拍車をかけて中華民国を誕生さ

せたが、革命勢力自体は依然として脆弱であり、中国革命に成功したとは言い難い⁷²。建国直後に臨時大総統の座は袁世凱へ移譲され、南京臨時政権が消滅し、孫文は日本へ亡命した。言うまでもなく、国民党の官製文学として出版された『西来庵』では、こうした革命に内包される否定的側面については一切描いていないのである。従来『西来庵』は、西来庵事件を史実に即して描く「大型のルポルタージュ」として見なされていたが、内実においては、実質的な政府刊行物であることが歴史描写の偏重に繋がったことは否定できない。

『西来庵』における歴史描写の偏重性は、台湾と中国大陸との紐帯を強調する物語展開からもうかがい知ることができる。西来庵での密議で余を囲むのは、羅に同行して華南地方より渡台した男たちであり、彼らは国民党の前身組織である中華革命党が送り込む工作員として描かれている。男たちは「中華革命党の命を奉じて、台湾へ来て皆を助ける」のであり、物語では西来庵事件が「中国大革命の一環、一筋の支流」として位置付けられていく。辛亥革命の台湾への伝播が繰り返し強調され、中華民国による治国こそが台湾人に「無限の希望と鼓舞」を与えると言説化される。それはあたかも国民党が台湾を日本の植民地から解放し統治する政治的正統性を呈示するかのようでもあった。

『西来庵』では、こうした中華革命党が派遣する工作員の1人に林資鏗（1878～1925年、字季商、号祖密）という人物がいる。史実では、林は台湾五大家族の1つである霧峰林家の末裔であり、父親の林朝棟は劉銘伝の側近として、山地開発に伴う樟脳経営を担っていた⁷³。日本の植民地統治開始後、林は父親とともに原籍の漳州へ戻り、1915年に中華革命党へ入党し、自身の潤沢な資金で孫文の革命を強く援助していった。やがて林は孫文の信頼を得て、閩南軍司令に命ぜられる。李喬は『西来庵』自序でも、林を重要な「革命同志」と見なし、「羅氏と林季商の関係は、とりわけ重要である」と明記していたが⁷⁴、物語中では次のような対話を設定していた。

「頼先生〔頼秀、即ち羅の偽名—筆者〕、ここは原籍の場所ではありますが、でも、我々は台湾でも先祖代々やってきました。我々は〔台湾に—筆者〕戻って革命のために奮闘すべきなのです。」

「そのとおりだ！林先生、私は……」老人の心中は感激し、言葉にならなかった。

「あなたは気概のある人で、わたくし林もそうです。私は力を尽くして台湾の同志が国土を回復してくれるのを手伝います。」

「わかった！」彼はさっと立ち上がると、口振りは朗らかで毅然としていた。手を差し出して林祖密と一度きつく握手を交わした⁷⁵。

『西来庵』では、物語の実質的主人公である羅が林との対話を重ね、台湾での抗日運動へ参加する決意を固めていく様子が描かれる。李喬は羅を孫文と関係の深い林と結び付けることで、「中華民国政府、中国国民党と台湾の抗日革命が直接関連しているという重要な史実」⁷⁶を説き、台湾と中国大陸のあいだで繋がる強い紐帯を表現しようとした。だが、実は林の事績は、西来庵事件の中心的要因ではなかった。同事件に関する「最も完備した専門書」であるはずの『余伝』

できえも、事件における「主要革命同志」の1人に林の名前を挙げていない⁷⁷。また、李喬が『西来庵』を創作するにあたり参照したという『革命全档』でも、林に言及するのは同書全8冊のうち計5頁ほどに相当する尋問調書のみであり、林は当局から取り調べを受けた1,000名を超える義民の1人に過ぎなかった。李喬自身も『西来庵』自序で、林の生涯が今後さらに進んで研究されることを期待したいと記したように⁷⁸、創作当時は依然として林の事件への関与は詳らかではなかったようだ。李喬は物語中で余ではなく羅に焦点を当てて描写するのと同様、史実の展開から逸脱しない範囲で、意識的に西来庵事件という日本統治期の代表的抗日事件を中華民国や国民党、あるいは「祖国」としての中国大陆に接続させて描いたと言えよう。前述の如く、これまで『西来庵』は史実に忠実な作品として評価されてきた。だが、実際には『西来庵』は官製伝記文学という枠組みの中で、作者自身による歴史の再編成を経て誕生した物語であったのだ。

2. 「民族」と「抗日」への傾斜

李喬は『西来庵』自序で、西来庵事件で羅が果たした意義について次のように記し、羅の物語を描き出す必要性を示唆している。

〔西来庵事件は—筆者〕三方面の反日勢力の大団結であったとわかる。余清芳は、一般民心の自衛本能である暴力に対する抵抗を代表する。江定は、地下の武装勢力の火種を代表する。羅俊は民族意識に基づく大義ある抗日だ。このように見てみると、羅俊こそが本当の意味での彼らの統領であったが、残念なことに大旗を掲げる前に敵手に落ちてしまい、切齒扼腕させられる⁷⁹。

李喬が『西来庵』で意図して物語の中心に羅を据えたことは、「民族意識に基づく大義ある抗日」を語るためであった。このように李喬は「民族」と「抗日」をハイライトに、西来庵事件の物語を描き出そうと試みたのだが、それは同作の発表が1970年代であるという時代的意味合いも大きかった。蕭阿勤によれば、1970年代における台湾人のあいだでの日本統治期に対する集団的記憶の基調とは、国民党が主導する中国民族主義を起点として、「台湾と中国大陆の関係」を確固として繋ぎ合わす歴史叙事モデルであったという⁸⁰。そして1970年代当時は、省籍にかかわらず台湾人が抱える「抗日」の経験こそが、過去の歴史に対する集団的記憶の中核を担っていたのである⁸¹。

台湾では1970年代に、日本統治期の文化や芸術、歴史が繰り返し再評価されていくが、そうした事例でも同様のことが言えた。例えば文学では、民族の自立や抗日を謳った日本統治期の台湾新文学が再評価され、それは自らの出自である「中国」にアイデンティティを求める強い姿勢として、台湾人読者のあいだで共感されていった。蕭阿勤はその典型例として、1976年に楊逵の短篇小説「圧不扁的玫瑰花」⁸²（「潰れぬバラ」）が日本統治期の台湾人作家の作品として、初めて中学国語教科書の教材に採用されたことを挙げている⁸³。主人公の数学教師の視線から描かれる、帝国日本の植民地統治に対する批判的隠喩と祖国中国に対する民族意識の強さは、当時の

台湾社会で大いに注目された。この時期には同時に楊逵以外の作家でも、頼和や呉濁流、張深切、楊華、呉新榮、張文環、巫永福、呂赫若、鍾理和などの描き出す物語が民族意識や抗日意識といった視点から歓迎され、彼らは台湾新文学を代表する台湾人作家として再評価されていった⁸⁴。

同様に、歌謡界でも1970年代は民族と抗日という2つの切り口を通して、日本統治期の流行歌が再評価された時代でもあった。陳培豊によれば、日本統治期の台湾語流行歌である「望春風」（1933年）や「雨夜花」（1934年）、「農村曲」（1937年）などは、李双沢や黄春明ら台湾人作家の言説によって、戦前の台湾人による日本の植民地統治に対する抵抗歌という位置付けで再評価されていったという⁸⁵。このように民族と抗日が結び付く1970年代の時代背景の中で、日本統治期の台湾語流行歌は、台湾人が帝国主義に抵抗して「祖国」への復帰を願う民族を謳歌した歴史的な証しとして解釈されていった⁸⁶。

要するに、1970年代末に発表された『西来庵』は、「同胞に対する、祖国に対する、民族に対する愛と思いやり」⁸⁷に溢れた「抵抗」の物語として評価されたが、そこでは国民党の息がかかった官製文学としての出版背景に基づき、中華民国や国民党の政治的正統性が代弁されると同時に、当時の台湾社会で瀰漫した台湾人の民族・抗日意識への関心を巧みに酌み取りながら、台湾人読者の集団的記憶を呼び起こす仕掛けが仕込まれていたと言えよう。だが、さらに興味深いのは、次節で詳論するように李喬が描く『西来庵』の中での「抗日」表象には、こうした概念とは別の角度から接続する「台湾意識」という描出さえも垣間見える点であった。

第4節 『結義西来庵』と台湾意識の再編成

1. 余清芳による「抗日」とアイデンティティの探求

ところで、李喬が政府刊行物である官製文学の創作に関与したのは、『西来庵』が初めてではない。早くには1971年に台湾省政府新聞処より『省政文芸叢書』（以下『省政叢書』と略す）の一作として長篇『山園恋』を出版し、1978年にも同叢書の中で長篇『青青校樹』を発表している⁸⁸。『省政叢書』とは、台湾省政府による台湾建設を宣伝するための官製文学である⁸⁹。『山園恋』では原住民の青年夫婦を主人公に山地社会の経済発展を題材にし、『青青校樹』では高校教師を中心に充実した学園生活の模様を描いている。ただし、これらの作品では表層的には台湾省政府の政績を賞讃しているかのように見えるが、実は李喬は物語の形式を借りながら、主題に関連する様々な社会的問題さえも提起していた⁹⁰。1970年代とは李喬自身の創作姿勢が大きく変わり始めた時期でもあり、台湾社会の時事問題を積極的に題材へ取り込み、作品上では盛んに社会批判を展開していった。李喬は『省政叢書』という政府刊行物の出版に関与したが、そこでは御用文学の創作に没するのではなく、自身の信条を物語に託していたとも言えよう。

それでは、こうした1970年代の李喬作品である官製文学『西来庵』では、作者自身の個人的信条は如何に表現されていたのだろうか。前節で論じたように、『西来庵』では羅にまつわる描写が物語全体の大部分を占めていた。だが、物語では西来庵事件の首謀者たる余の存在が完全に看過されたわけではなかった。そこでは同事件の顛末が描かれると同時に、その伏線として台湾

割譲以来の義民による抗日運動の模様も叙述されていく。台湾割譲直後には余も「異族の残虐で勝手気ままな横暴振りを目の当たりにし」、「密かに武装抗日の義民団体に加入した」のであり、李喬は余が抗日運動へ加わる姿を描きながら、当時の台湾の様子を次のように叙していく。

裕福な人々は、妻を携え子を連れて閩南や広東の原籍に戻ることができるが、圧倒的多数の台湾人は皆大陸へ戻る手立てがない。台湾は彼らが根を下ろして育った場所、血肉の繋がりのある場所であり、たとえ離れることができたとしても、誰が甘んじて離れようか？

こうして、もともと至る所で次々と湧き起こった、始末しきれず鎮圧できない抗日の烽火であったが、この特別な年に、義民義軍が、嵐のような勢いで現れて前の屍を乗り越え後から続き、台湾全島が揺れ動いた⁹¹。

ここで李喬が描き出す台湾とは、台湾人が「根を下ろして育った場所、血肉の繋がりのある場所」であり、それは帰属意識を求めた郷土というルーツでもあった。このような台湾に対する帰属意識は、物語の実質的主人公である羅が検挙されて以降、余にまつわる描写の中で如実に表出していく。例えば、噍吧岬の山中で「大明慈悲国」の大元帥に推挙された余が掲げる大旗には、「日寇回穴、還我河山（日本の侵略者は立ち去れ、我らに国土を返せ）」、「保我台湾、帰我祖国（我らの台湾を守れ、我らに祖国を返せ）」、「佔我家園、誓不兩立（我らと侵略者は、俱に天を戴かず）」といった標語が並び、西来庵事件をめぐる義民の言動の裏側に貼り付く強い台湾意識が現われていた。そして当局の制圧を受けてから噍吧岬での抗日運動とは、もはや辛亥革命の影響下での「抵抗」ではなく、余ら台湾人自身が自らを頼りに郷土を守る「抵抗」へと変容していく。

余〔清芳—筆者〕大元帥の訓話は、とても簡単で、わかりやすかった。彼は言った。「俺たちは生きていけない、だから立ち上がり反抗するのだ。」

俺たちは統治者が日本の奴らだから反抗するのではない、日本の奴らは漢人ではなく、俺たち漢人を生きていけなくさせる、俺たちはだから日本の奴らに反抗するのだ。

……

俺たちは孤独ではない、全台湾の人々が立ち上がって応じてくれるはずで、大陸の祖国は俺たちを支援してくれるはずだ——今は連絡が途切れているが、一度繋がれば、兵力や火器が運ばれてくるはずだ！……」⁹²

これら余の言動では、台湾の郷土を防衛するために抗日運動を起こす大義が語られるが、その一方では、台湾と「大陸の祖国」との紐帯がすでに「途切れている」ことが逆説的に暗示される。そして余らは「大陸との通信が途切れ、人的支援、火器の供給、いずれもが道を断たれてしまう」ことで噍吧岬にて敗壊し、「台湾が日本に占領された50年間の、抗日革命事件の中で、最も大きく、壮烈で、悲壮な一戦」は終幕する。前述のように『西来庵』では、羅の中華民国に対する憧憬や辛亥革命の台湾への伝播に対する期待を中心に、台湾と中国大陸の強い結び付きが象徴的に

叙述されていた。だが、羅が検挙された後は一転し、余ら義軍一統が「大陸の祖国」から支援を受けることなく瓦解していく模様が描かれていく。このように『西来庵』では、余の抗日武装蜂起が失敗し、彼らが捕捉され処刑されるまでの過程を描くことで、台湾と中国大陸との連絡が断絶し、台湾人が自らの運命を決断していく姿を強く印象付けていた。それはあたかも台湾が将来的に背負うことになる歴史的・政治的宿命を予言するかのようでもあり⁹³、『西来庵』の物語は台湾と中国大陸のあいだで結び付く民族の連帯という虚構さえも解体していく。『西来庵』で描かれる余の「抗日」表象とは、もはや羅の言説に代表される中華民族の団結ではなく、台湾を中心とする帰属意識、郷土回復の探求へと変化していくのであった。

それでは何故に『西来庵』では、羅を主人公に台湾と中国大陸の紐帯を主題として描きながら、一方では余を軸に台湾の「祖国」からの離脱という対極的な言説を用いたのだろうか。前述のように、李喬は『西来庵』の創作に当たり『革命全档』を中心に資料を収集したほか、西来庵事件での生存者や遺族など関係者からも口述記録を取り、2年半に及ぶ長期取材を実施した。その時の体験は『西来庵』自序においても、次のように記されている。

8冊の巨大な檔案の300万字近くに及ぶ史料〔『革命全档』—筆者〕を詳細に読み込み、さらには台南・高雄の2縣市4村を訪ね、伝承を仔細に調べあげ、逸話を収集し、生き残りの古老を訪ね、古戦場を弔い、死者の遺影を仰ぎ見て、忠魂塔〔前述「抗日義士忠魂塔」—筆者〕の骨倉に入り、刀や銃弾の跡が未だに残る烈士の遺骸を目の当たりにした後で、筆者はフィクションをもって処理することはもはや忍び難く、その勇気も失われ、如何ともできなかった⁹⁴。

この記述だけでは、李喬が台湾南部の取材経験で何を感じ得たのか具体的にうかがい知ることはできないが、李喬はその後も繰り返し同様の見解を述べている。それが最も詳しく叙述されるのが、『幽情』三部作(2010～13年)の第一部『咒之環』の自序である。『わたし』は何者なのか？『わたし』とは誰なのか？と自らのアイデンティティを探求する印象的な書き出しで始まる同序は、次のように記されている。

わたしは高さ1メートル50センチほど、四方を囲む壁からは20数センチほどの隙間しかない巨大な「骨倉」の前に立った。

形の整ったあるいは形の無い骸骨やされこうべ、頭蓋骨、椎骨、二の腕や下膊の骨、太腿やすねの骨、肋骨、裂けてばらばらになった骨盤の骨……すべてが灰色だった。分厚い埃に……分厚い歴史に覆われて沈殿していた……

……

わたしは比較的整ったされこうべを持ち上げた。右側のこめかみ部分に人差し指大の小さな穴が空いている。左のこめかみには拳骨くらいの大きさの穴が空いている。そうなのだ、銃弾が右のこめかみから入り、精確に左のこめかみを突き抜けて近くの肉骨で破裂したのだ

……わたしは見た、わたしは本当に見えたのだ。わたしがそこにいるのを！

わたしはすぐに 1915 年と 1976 年のあいだで身動きが取れなくなった。

1915 年のわたしが、そこにいる。わたしのされこうべは 1976 年のわたしの掌で見つめられている……わたしは自分が見えたのだ、わたしは自分を探し出したのだ。

それならば、わたしは誰なのだろうか？わたしとは何者なのだろうか？⁹⁵

李喬は『西来庵』での取材を通じて、台湾が抱える歴史の重厚さをあらためて自覚し、「わたしは誰なのだろうか？わたしとは何者なのだろうか？」と自身のアイデンティティを強く問う体験を得た。そして李喬は『西来庵』を創作していく中で、自らの帰属意識を台湾に求めていく。この点に関しては、自伝的評論『我的心靈簡史』でも、次のように述べている。

この伝記小説『結義西来庵』の創作は、私を蛹化させ羽化させ、1 人の「台湾小説家」を確立させた。……私はよく振り返る。もしも『結義西来庵』での何重もの鍛錬、史料の吸収とフィールドワークでの辛抱、及び「台湾人意識」の涵養を経験しなければ、私は台湾歴史シリーズの作品を書くことはできなかつた⁹⁶。

『西来庵』での創作経験は、李喬自身に「台湾人意識」を強く自覚させる契機となった。李喬はインタビュー記事「個人反抗與歴史記憶」の中でも、『西来庵』の物語と台湾に対する帰属意識の関係、その後自らの創作理念の変化について語り、同作を創作する過程で体験した台湾意識の再編成こそが、自分自身の創作姿勢に対して大きな影響を及ぼしたことを証言している。

この全ての経験〔西来庵事件についての取材経験—筆者〕は私に 2 つの重要な啓発を与えました。1 つはどのように実際の接触や実証を通じて、文字資料を文学に転化させるのかということです、〔文学的—筆者〕技巧の上では私は乗り越えることができました。2 つ目は台湾の歴史とその後皆さんが語る「台湾意識」に対して、私は比較的深く精通したということです⁹⁷。

李喬は『西来庵』発表の直後にも、短篇「尋鬼記」(1978 年)で、「わたし」を主人公に忠魂塔の骨倉での感慨をメタフィクションの形で表現しており、その体験が如何に李喬に対して強烈な衝撃を与えたのか推察できる⁹⁸。李喬の代表作『寒夜』三部作をはじめとする台湾近現代史の展開に取材した「歴史素材小説」では、長期間の資料収集とその実証を経て、作者自身による歴史解釈により作品が編み出されていったが、『西来庵』での創作体験とは「歴史素材小説」を産み出す直接的要因であった。そして『西来庵』における余を軸とした台湾への帰属意識、郷土回復の探求といった物語展開とは、こうした李喬による台湾意識の再編成をめぐる体験で得た感慨の投影でもあったと言えよう。

2. 1970年代台湾社会と台湾基督長老教会

一方、『西來庵』での「抗日」表象をめぐる台湾意識の描き方は、1970年代当時の台湾社会の変容から影響を受けた可能性もある。『西來庵』発表の1977年には郷土文学論争が起きているが、当時李喬は論争に関与しておらず、李喬が深く関係した『台湾文芸』の本土派作家たちも論争については基本的に沈黙を保ったままであった⁹⁹。『西來庵』における同論争からの影響については、今後の詳細な研究にまつところだが、同作に対しては1970年代初頭より続いた台湾基督長老教会（以下、長老教会と略す）による一連の政治的行動の影響も見られるのではないだろうか。

長老教会とは、台湾で最大のプロテスタント教派であり¹⁰⁰、その信者の大部分に本省人を抱えた「台湾の土壤に根づいた教会」¹⁰¹である。台湾での宣教は19世紀半ば以降、イギリス長老教会のマックスウェルにより台南から始まり（1865年）、北部ではカナダ長老教会のマカイが淡水でも宣教を始めた（1872年）。その後、長老教会は日本統治期には20世紀初頭をピークに、カトリックや日本人教会を凌ぐ圧倒的な勢いで信者数を増大させた¹⁰²。「戦後」も長老教会は台湾宣教百年を祝う「教会倍加運動」等により信者数を増加させ¹⁰³、その規模は1970年代末には、台湾における全プロテスタント教徒の8割を占めるまでに至ったという¹⁰⁴。

「台湾のキリスト教史は、その悲劇的な政治史を反映する」¹⁰⁵とまで言われるように、台湾におけるキリスト教の宣教と台湾社会の歴史的・政治的展開は切り離して考えることができない。長老教会による宣教も、このような台湾近現代史の展開と密接に結び付いている¹⁰⁶。こうした中で、言わば台湾の歴史を背負う長老教会が、政治的禁制が長らく続く国民党統治期の戒厳令下でも信者同士で連携し合い、1970年代には「約20万人〔の信者—筆者〕と全国1,008の教会を擁する〔台湾—筆者〕最大の合法的結社」¹⁰⁷として活動したことは看過できまい。

周知の通り、1970年代には台湾をめぐる国際情勢が急展開し、1971年にはニクソン・ショック、中華人民共和国の国連加盟決定と続き、国府は国際政治の表舞台から姿を消した。こうした中で、長老教会は1971年12月に「台湾基督長老教会対国是の声明與建議」（「台湾基督長老教会の国是に対する声明と建議」。以下、国是声明と略す）を発表する。国是声明では、「ニクソン大統領」が「中国大陸を訪問する」ことに強く警戒し、国際世論が主張する「台湾の中共政権への併合」や「台北と北平の直談判」は、「台湾地区1,500万の人民の人権と意志」を黙殺し、「台湾地区の人民を売りわたすことにほかならない」と世界へ向けて主張した¹⁰⁸。注目すべきは、この時、同時に国内へ向けては「徹底的に内政を革新し」、台湾の「国際的な名声と地位を維持する」ために、「中央民意代表の全面的改選」を強く要求したことである¹⁰⁹。当初、国是声明は政治行為ではなく信仰に基づく宗教的告白であると表向きには主張されたが¹¹⁰、台湾社会の民主と自由を謳い、中央民意代表の全面改選を提議する要求は、青年知識人が集結し改革言論を繰り返した『大学雑誌』での「国是諍言」（1971年10月）を彷彿させる政治的声明とも言えた。

こうした長老教会による台湾の内政改革と国際的地位の維持を訴える宣言は、「国是声明」後にも繰り返される。1975年11月には、同年1月に当局が台湾語のローマ字聖書を没収したことに抗議し、長老教会は「我們的呼籲」（「われわれの呼びかけ」）を表明した¹¹¹。「われわれの呼びかけ」では、台湾語聖書の使用許可を求め、宗教信仰の自由を主張する一方で、「キリスト教

徒の政治的責任」¹¹²として、「[台湾人が—筆者] 自らの運命を決定する権利」の保障と「開放的で民主的、公正、廉潔且つ能力ある政府」への変革を強く要求している¹¹³。また、1977年8月には「台湾基督長老教会人権宣言」(以下、人権宣言と略す)を発表している。同年6月に、カーター大統領は共産党政府との国交正常化交渉の開始を決断した¹¹⁴。それを受けて「人権宣言」では、「台湾人民の独立及び自由」のために「台湾の将来は台湾の1,700万の住民によって決定されるべき」と高らかに謳い、「台湾を1つの新しく独立した国家」として認知するように、アメリカを中心に世界へ向けて強く主張した¹¹⁵。このように長老教会は、台湾をめぐる国際情勢や内政事情の変化に応じて、戒厳令下でありながらも一連の政治的声明を発表したのである。それは世界に対して台湾人の自決権を尊重し、台湾を「新しく独立した国家」として認めるよう求める先駆的主張であり、台湾意識の強い表出とも言えた¹¹⁶。

李喬は台湾社会の政治的変容の中で、1970年代を通して長老教会が宣言した3度にわたる政治的声明に対して、無関心ではなかった。確かに李喬は今では敬虔なクリスチャン作家として知られているが、キリスト教の洗礼を受けたのは1994年であるという¹¹⁷。「私は50歳以後に基督神学に接触した」¹¹⁸という李喬自身の言葉を勘案しても、『西来庵』発表の1970年代末では、創作に対するキリスト教の宗教的・思想的影響は限定的であった可能性が高い。李喬は1960年代初頭に台湾文壇に登場して以来、宗教的関心はむしろ仏教思想へ傾斜していたのであり、葉石濤が言うように「[李喬は—筆者] 仏教哲理の影響を比較的深く受けた作家」¹¹⁹として見なされていた。当時は李喬自身も、壹闡提の筆名で「簡介『金剛経』」や「浅談仏経読法」など仏典に関する論評を発表し¹²⁰、さらには仏教学者である紀野一義の著作を翻訳していたことから¹²¹、仏教に対する宗教的関心の高さを認めることができよう。ただし、一方では李喬の配偶者である蕭銀嬌が、早くには李喬自身よりも20年以上も前に洗礼を受け、長老教会の敬虔な信者として長年活動し続けてきたという事実も軽視できまい¹²²。しかも先述のように、李喬は1970年代には台湾の社会的事象を積極的に題材へ取り込み始めたのであり、社会変革を訴え続けた長老教会の活動にも注視していた¹²³。李喬は「台湾社会で重大事件が起きた時、立ち上がり『強烈に反応した』のはキリスト教であり、とりわけ台湾基督長老教会であった」¹²⁴と、長老教会が戒厳令下で果たした政治的役割を高く評価していたのである。

もっとも、言うまでもなく西来庵事件とキリスト信仰については大きな接点がない。むしろ同事件と直接関係するのは王爺信仰である¹²⁵。余ら事件の中心人物はいずれも西来庵の敬虔な信徒であり、西来庵の主神こそ王爺信仰では代表的神祇である五福大帝であった¹²⁶。こうした同事件における王爺信仰の重要性については、『西来庵』でも描写されている。『西来庵』は冒頭から、「民国4年(西暦1915年)4月16日、陰暦3月3日。この日は台南市西来庵で、五福大帝の序列三位である『宣靈公』劉元達尊神の誕辰であった」という一文で始まり、物語展開と王爺信仰の強い関連性が示唆される。余ら信徒は、「西来庵では陰暦の毎月3、6、9日には必ず『降筆〔占い—筆者〕』を行う」のであり、日頃から五福大帝に対して抗日決起の成否を占っていた。

王藍石老拳人は筆生〔タンキーが話す意味を記録する者—筆者〕の役目を負い始めた。……

老拳人は鬚をつまみ、大喜びした。「五帝爺〔五福大帝—筆者〕は仰る、大事は、実行可能なり！」

また尋ねた。抗日は、成功するのか？

線香の灰の上に、横に三線、縦に一線を引いた。

老拳人は言った。「これは王の字じゃ。王とは、天下の向かうところなり。〔必要不可欠な—筆者〕三者とは、天・地・人なり。天・地・人とは『三才』を言う、3つを繋げれば王じゃ。王とは、天下を支配することなり。抗日は絶対に成功する。」

また尋ねた。抗日は、どこから始めればよいのか？¹²⁷

このように『西来庵』では、西来庵事件での余らによる抗日武装蜂起そのものが、台湾の土着宗教である王爺信仰に委ねられていることを描いていく。物語で象徴的に描出されるのは、王爺信仰のもとで台湾の民衆が結集し、台湾総督府という絶対的権力に対して強く「抵抗」していく姿であった。

李喬がこうした『西来庵』の物語を、台湾「最大の合法的結社」である長老教会が政治的声明を繰り返した1970年代に創作したことは、決して偶然ではないだろう。物語と現実のあいだには、総督府による強圧政治、蒋介石・蔣経国を頂点とする独裁政治という社会的背景の差異は見られるが、双方に共通するのは宗教的關係で繋がり統治権力に対してあくまでも「抵抗」していく民衆の存在である。『西来庵』では、王爺信仰を拠り所とする民衆蜂起を物語ることで、絶対的な統治権力に対する民衆の集団的「抵抗」の現実性を示唆し、それは同時代においてキリストの教えのもとに団結し国府に抵抗していく、長老教会20万人の信者たちの姿へと大きく反転していく。つまり『西来庵』の物語展開とは、逆説的ではあるが、現行の政治体制に異議申し立てを行い、「台湾を1つの新しく独立した国家」として認知するよう国際社会に訴えていく、言わばもう1つの台湾の土着宗教である長老教会の行動に対して、大きな期待を寄せるかのようでもあった。前述のように、李喬は戒厳令下での長老教会の政治的役割を高く評価していた。筆者の推測ではあるが、李喬は長老教会による台湾意識を掲げた一連の政治的声明に触発されるかのように、余を中心とする台湾意識の高揚と統治権力への「抵抗」というテーマを、『西来庵』の物語で力強く描き出そうと試みたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、これまで十分に議論されなかった『西来庵』を中心に、作中で描かれる「抗日」表象の重層性について考察した。実質的には政府刊行物である『伝記叢刊』の一作として出版された経緯もあり、従来の論評では同作が西来庵事件の史実を如実に写し出すものとして評価されてきた。だが、実は同作は李喬が史実の枠組みの中で同事件の歴史を解釈し直し意図的に綴り直した物語であり、そこには中華民族意識と台湾意識という二面性が内包されていた。事件の中心的義民である羅の物語を描くことで、中華民国や国民党による日本の植民地支配への抵抗と台湾統

治の正統性を代弁していくが、それは1970年代当時の台湾社会で瀰漫した「祖国」に対する民族意識という台湾人の集団的記憶を呼び起こす言説とも化していた。その一方で、同作では李喬が取材経験の過程で獲得していく台湾意識を基盤とする自身のアイデンティティの再編成が、余を中心とした義民による「抵抗」の物語の中でも顕在化していたと言える。そして、そこでは同じく1970年代の台湾社会で3度にわたり政治的声明を発表し、「台湾を1つの新しく独立した国家」として認知するよう強く主張した長老教会や台湾社会の政治的変化に対する大きな期待さえもうかがえた¹²⁸。

このように李喬は『西来庵』を創作するに当たり、官製伝記文学という枠組みを利用しながら、西来庵事件における義民の「抗日」表象を軸にして、台湾人の「抵抗」の姿を重層的に描き出したのである。李喬文学における最大の特徴である「歴史素材小説」について、彭瑞金は「ただの歴史的現象の客観的な再現ではないかと常に人に誤解され、作家が歴史を通じて表現した個人的創作観に伴う苦心は忘れられてしまう」¹²⁹と指摘する。戒厳令下の官製文学という枠組みを仮借し、中華民族意識に基づく歴史的人物の事績を語ると同時に、高揚する自らの台湾意識さえも見事に表出させる描き方は、まさに李喬にとって「個人的創作観に伴う苦心」であったと言えよう。そして、こうした官製文学の中での従属と抵抗の両面性とは、台湾に限らず創作の自由において政治的制約が課されることの多かった20世紀東アジアの文化環境のもとで、1人の人間が如何にして自身の言葉を丹念に選び取り、その思いを作品の中で伝えようとしたのかという点に対して、実に大きな示唆を与えるものでもあろう。

注

- 1 葉石濤『台湾文学史綱』高雄、春暉、1987年、67頁。
- 2 陳芳明『台湾新文学史』台北、聯経、2011年、788頁。
- 3 李喬の経歴については、明田川聡士「李喬『小説』と1960年代台湾文学界における安部公房の受容——台湾文学における1960年代実存主義運動から80年代民主化運動への展開——」（『日本台湾学会報』第16号、2014年）等を参照されたい。
- 4 李喬「戦後台湾小説的文化批評」『国文天地』第16巻第5期、2000年、27頁、及び李喬『文化、台湾文化、新国家』高雄、春暉、2001年、275頁。これらで李喬は、頼和や楊逵、張文環、龍瑛宗、呂赫若、鍾理和、呉濁流、楊華などの創作について言及している。
- 5 李能棋『結義西来庵』台北、近代中国、1977年。同書は1985年に再版され、2000年には版元を移して、「李喬」の名前で新版が刊行されている（李喬『結義西来庵』台南、台南県文化局）。近代中国版と台南県文化局版では、「祖国大陸」を「中国大陸」に書き改めるなど語彙の違いが若干見られる以外は、内容面での異同は特にない。また、近代中国版では作者が「李喬」であることを明記した紹介文は附されていない。なお、李喬自身によれば、当初『西来庵』の題名は『冤恨惨絶録』が予定されていたという（李喬「文学的郷土性と世界性」『台湾文芸』第80期、1983年、16頁）。
- 6 李喬「一位台湾作家的心路歷程」、李喬『李喬短篇小説全集資料彙編』苗栗、苗栗県立文化中心、2000年、49頁。なお、初出は『亞洲人』第7期、1984年である。
- 7 李喬の作品における「歴史素材小説」の定義については、明田川聡士「『虚構』の想像と創造——李喬《寒夜三部作》におけるフォークナー作品の影響を中心に——」（『日本台湾学会報』第13号、2011年）を参照されたい。
- 8 李能棋、前掲書、自序2頁。なお、引用部の傍点は筆者によるものである。
- 9 彭瑞金「歴史文学的掙扎與蛻變」、彭瑞金『駁除迷霧找回祖靈』高雄、春暉、2000年、142頁。
- 10 許素蘭『給大地作家書——李喬——』台北、典藏芸術家庭、2008年、112頁。

- 11 彭瑞金『台湾新文学運動 40 年』（高雄、春暉、1997 年）、山口守編『講座台湾文学』（国書刊行会、2003 年）、中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』（研文出版、2014 年）等でも『伝記叢刊』に関する論述は一切見られない。
- 12 王鴻仁「訪劉紹唐先生談伝記文学」『書評書目』第 55 期、1977 年、11 頁。
- 13 同上論文、12 頁。
- 14 『西來庵』に関する主な先行研究には、花村「談李喬『結義西來庵』一書裏調子の運用」『中外文学』第 8 巻第 5 期、1979 年、及び張怡寧「李喬伝記文学《結義西來庵》(1977) 中的抗日反思與殖民批判」『台湾文学論叢』第 4 輯、2012 年等がある。なお、本稿では 1977 年初版の李能棋、前掲書を底本に用い、テキストの引用は全て拙訳である。
- 15 余は屏東に生まれ、台湾割譲直後の「日台戦争」では抗日運動に身を投じた。その後、公学校で日本語を習得し、台湾南部で巡查補や役場の書記などをつとめたが、各地の廟宇で抗日思想を説いたことで、1909 年より 3 年間台東の浮浪者收容所に収監されている。釈放後、余は偽名を使い西來庵近隣で精米店を経営し、西來庵では信徒に対して抗日思想を説いた。余の経歴については、程大学編『台湾先賢先烈專輯——余清芳伝——』（台中、台湾省文獻委員会、1978 年）、及び王詩琅『余清芳事件全貌』（台北、海峡學術、2003 年）、許雪姬ほか『台湾歴史辞典』（台北、行政院文化建設委員会、2004 年）、康豹『染血的山谷』（台北、三民、2006 年）等に詳しい。
- 16 西來庵の址は、現在の台南市中西区青年路 121 号、123 号である。西來庵事件後、廟宇は当局によって破壊され、日本統治期終了後には跡地に教会と集合住宅が建てられた。なお、西來庵はその後幾度か場所を変えて再建され、現在は台南市北区大興街に建つ。程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』、及び康豹、前掲書を参照した。
- 17 史明『台湾人四百年史』音羽書房、1962 年、380 頁、及び戴國輝『台湾』岩波書店、1988 年、75 頁。
- 18 丘秀芷「結義西來庵——噶吧呷事件——」『中央日報』1978 年 10 月 25 日、及び沈明進「評李喬的『結義西來庵』」『中央日報』1979 年 3 月 4 日。
- 19 周婉窈〔石川豪・中西美貴・中村平訳〕『図説台湾の歴史』平凡社、2013 年、108 頁。なお、史明、前掲書、及び戴國輝、前掲書では、死刑者数を 903 名としている。
- 20 戴國輝、前掲書、75 頁。なお、伊藤潔によれば、866 名の死刑囚のうち 95 名が処刑されたところで、大正天皇即位式の恩赦により 766 名が無期刑に減刑されたという（伊藤潔『台湾』中央公論社、1993 年、97 頁）。
- 21 黄昭堂『台湾総督府』教育社、1981 年、101 頁。
- 22 武者小路実篤「八百人の死刑」、武者小路実篤『武者小路全集 3』小学館、1988 年、432-434 頁。また、このほかにも武者小路は『白樺』で西來庵事件について幾度か言及し、台湾での日本の植民地政策を批判している。
- 23 周婉窈、前掲書、108-110 頁。
- 24 楊逵は 1982 年に半世紀ぶりに訪日した際、戴國輝に対して「〔西來庵事件は——筆者〕印象が強くて、頭にも残っている」と語っていた（楊逵「一台湾作家の七十七年」『文芸』第 22 巻第 1 号、1983 年、298 頁）。
- 25 林梵『楊逵画像』台北、筆架山、1978 年、56 頁。
- 26 「台胞抗日史、乃血淚写成！」『中国時報』1976 年 10 月 25 日。
- 27 康豹、前掲書、133 頁。
- 28 張家鳳「噶吧呷惨史」『南瀛文獻』第 23 巻、1978 年、69 頁。
- 29 なお、1958 年には西來庵事件を題材にして、映画『血戦噶吧呷』（華興、何基明監督）が製作、上映されたが、同映画は当時教育部から唯一顕彰された台湾語映画であったという（黄仁・王唯編『台湾電影百年史話』台北、中華影評人協会、2004 年、188-189 頁、及び徐榮渠『百年台湾電影史』新北、揚智文化、2012 年、49 頁）。
- 30 李喬、前掲「一位台湾作家的心路歷程」48-49 頁。なお、台湾農民組合大湖支部長として活動した李木芳については、『台湾総督府警察沿革誌』にも記述が見られる（台湾総督府警務局編『台湾社会運動史』龍溪書舎、1973 年）。
- 31 李能棋、前掲書、自序 1-2 頁。
- 32 李喬「流転」、李喬『李喬短篇小説全集 6』苗栗、苗栗県立文化中心、2000 年。なお、初出は『中華日報』1972 年 12 月 26-28 日である。
- 33 李能棋、前掲書、自序 1 頁。
- 34 国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編『台湾文獻書目解題第 4 種伝記類 1』台北、国立中央図書館台湾分館、1991 年、159 頁。なお、近代中国出版社は 1977 年 3 月には中華民国史研究を中心とする学術誌『近代中国』を創刊している。
- 35 吳橋「人性與同情」『書評書目』第 55 期、1977 年、14 頁。この時の招聘作家は、鍾肇政、李喬、李永熾、林文月、謝霜天、白慈飄、羅秋昭、丘秀芷、蘇雲青、李新民である。

- 36 国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編、前掲書、254頁。なお、『伝記叢刊』（第一期）での『西来庵』以外の作品は、鍾肇政『丹心耿耿屬斯人——姜紹祖伝——』（台北、近代中国、1977年）、李永熾『不屈的山岳——霧社事件——』（台北、近代中国、1977年）、林文月『青山青史——連雅堂伝——』（台北、近代中国、1977年）、謝文玖（筆名、謝霜天）『耿耿此心在——翁俊明伝——』（台北、近代中国、1977年）、白慈飄『啓門人——蔡惠如伝——』（台北、近代中国、1977年）、羅秋昭『大湖英烈——羅福星伝——』（台北、近代中国、1977年）、丘秀芷『剖雲行日——丘逢甲伝——』（台北、近代中国、1978年）、蘇雲青『念茲在茲——丘念台伝——』（台北、近代中国、1984年）、李新民『愛國愛鄉——黃朝琴伝——』（台北、近代中国、1984年）である。
- 37 蔣経国の「文化建設」については、菅野敦志『台湾の国家と文化』（勁草書房、2011年）に詳しい。また、国民党の文芸政策の変化については、許菁娟『台湾現代文学の研究』（晃洋、2008年）、及び郭沢寛『官方視角下的郷土』（高雄、麗文文化、2010年）、赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』（東方書店、2012年）等に詳しい。
- 38 李喬『個人反抗與歴史記憶』、李喬、前掲『李喬短篇小説全集資料彙編』67頁。なお、初出は『中国時報』1998年10月20-23日である。
- 39 鍾肇政『鍾肇政全集25』桃園、桃園県文化局、2002年、452頁。
- 40 鄭尊仁『台湾当代伝記文学研究』台北、秀威資訊科技、2003年、212頁。
- 41 羅秋昭『羅福星伝』台北、黎明、1974年。
- 42 鄭尊仁、前掲書、213頁。なお、羅福星の抗日事績が国民党統治下で如何に評価されたのかについては、何義麟「戦後台湾抗日運動史の構築——羅福星の革命事績を中心に——」（五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」』風響社、2006年）に詳しい。
- 43 鄭尊仁、前掲書、215頁。
- 44 同上書、220頁。
- 45 同上書、214、220頁。
- 46 林衡道主編、程大学編訳『余清芳抗日革命案全档』（台中、台湾省文献委員会）は、1974-76年に全4集、8冊が刊行された。ただし、第1輯第1冊と第1輯第2冊のみ、程大学・王詩琅・呉家憲編訳である。
- 47 国立中央図書館台湾分館特蔵資料編纂委員会編、前掲書、72頁。
- 48 程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』。
- 49 李喬、前掲論文「文学的郷土性與世界性」16頁。
- 50 沈明進、前掲論文。
- 51 周宗賢「噍吧哖事件大屠殺の真相」『淡江人文社会学刊』第17期、2003年、51頁。
- 52 鍾肇政、前掲『丹心耿耿屬斯人——姜紹祖伝——』台北、近代中国、1977年。姜紹祖（1875～95年）は、「日台戦争」で抗日運動に身を投じた客家人の義民である。
- 53 朱西甯『表率群倫の林子超先生——林森伝——』台北、近代中国、1982年。林森（1868～1943年）は国民政府第三代主席であり、抗日戦争中に重慶で没している。
- 54 王鴻仁、前掲論文、10頁。
- 55 注5を参照されたい。
- 56 彭瑞金「読『結義西来庵』」『民衆日報』1978年10月21日。
- 57 花村、前掲論文、149頁。
- 58 同上論文、149頁。
- 59 沈明進、前掲論文。
- 60 注35、36を参照されたい。
- 61 丘秀芷、前掲論文。
- 62 沈明進、前掲論文。
- 63 同様に、張怡寧、前掲論文も『西来庵』が史実を克明に描き出すという評価の枠を越えていない。ただし、「伝記」と「伝記文学」を区別して扱う張の考察は、拙論執筆の上でも参考になったことを挙げておく。
- 64 鄭尊仁、前掲書、148頁。
- 65 同上書、149-150頁。
- 66 花村、前掲論文、149頁。
- 67 同上論文、149-150頁。
- 68 羅は雲林斗南の出身。羅の経歴については、程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』、及び王詩琅、前掲書、許雪姬ほか、前掲書、康豹、前掲書等に詳しい。

-
- 69 保良局については、檜山幸夫「台湾初期統治の歴史的問題について——台北保良局設置条件の分析とその日本植民地統治上における意義——」（『史叢』第19号、1976年）を参照した。檜山は、保良局の設置を要求した台湾人紳商が目指したものは「日本軍の誤った処罰、暴行・略奪から自己を守る事であり、同時に『土匪』等の襲撃・強奪を日本軍を使って防ぎ、更に旧来の特権的地位を住民の代表者として位置付ける事によって確保」するため、「その保障・代償として、日本に対する忠誠と服従を誓い、総督府の民政・地方行政を補助し、日本軍の手先として反日抵抗分子を日本軍に売渡すという反民族的行為を行った」と指摘する（同上論文、74-75頁）。
- 70 李能棋、前掲書、56-57頁。
- 71 同上書、62頁。
- 72 野沢豊『辛亥革命』（岩波書店、1972年）、及び川島真『近代国家への模索』（岩波書店、2010年）等を参照した。
- 73 林資鏗の経歴については、外務省政務局編『現代支那人名鑑』（外務省政務局、1916年）、及び外務省情報部編『現代支那人名鑑』（外務省情報部、1924年）、支那研究会編『最新支那官紳録』（北京・支那研究会、1918年）、曾迺碩『国父與台湾的革命運動』（台北、幼獅、1978年）、許雪姬ほか、前掲書等を参照した。
- 74 李能棋、前掲書、自序1頁。
- 75 同上書、64-65頁。
- 76 李能棋、前掲書、67頁。なお、辛亥革命の台湾への波及については曾迺碩、前掲書、及び蔣子駿『辛亥革命與台湾早期抗日運動』（台北、文史哲、1990年）に詳しい。
- 77 程大学編、前掲『台湾先賢先烈專輯』を参照した。
- 78 李能棋、前掲書、自序1頁。
- 79 同上書、自序1頁。
- 80 蕭阿勤『回歸現実』台北、中央研究院社会学研究所、2008年、146頁。
- 81 同上書、146頁。
- 82 楊貴「圧不扁の玫瑰花」（原題「春光関不住」）は、楊逵が緑島で政治犯として服役中に創作した短篇であり、獄中誌『新生月刊』（1957年6月）に掲載された。1976年に中学国語教科書で採用されるに当たり、作者名の本名への改訂、原題からの改題が行われた（楊逵『楊逵全集8』台南、国立文化資産保存研究中心籌備処、2000年、240-241頁）。なお、『新生月刊』については、黄文成『関不住的繆思——台湾監獄文学縦横論——』（台北、秀威資訊科技、2008年）に詳しい。
- 83 蕭阿勤、前掲書、185頁。
- 84 同上書、168-181頁。
- 85 陳培豊「台湾の文学と歌謡」、『中国21』第36期、2012年、197-203頁。
- 86 同上論文、203頁。
- 87 沈明進、前掲論文。
- 88 李喬『山園恋』台中、台湾省政府新聞処、1971年、及び李喬『青青校樹』台中、台湾省政府新聞処、1978年。
- 89 『省政叢書』については郭沢寛、前掲書に詳しい。同叢書は1965年から1980年まで、継続的に刊行された（郭沢寛、前掲書、31-34頁）。
- 90 同上書、252頁。
- 91 李能棋、前掲書、74頁。
- 92 同上書、141頁。
- 93 許素蘭、前掲書、112頁。
- 94 李能棋、前掲書、自序2頁。
- 95 李喬『咒之環』台北県、印刻文学、2010年、12-13頁。
- 96 李喬『我的心靈簡史』台北県、望春風文化、2010年、57-59頁。
- 97 李喬、前掲「個人反抗與歴史記憶」68頁。
- 98 李喬「尋鬼記」、李喬『李喬短篇小説全集8』苗栗、苗栗県立文化中心、2000年。なお、同全集によると、初出は『中央日報』1978年1月である。
- 99 郷土文学論争については、陳正醒「台湾における郷土文学論戦」『台湾近現代史研究』（第3号、1981年）、及び游勝冠『台湾文学本土論の興起與發展』（台北、群学、2009年）等に詳しい。
- 100 台湾のキリスト教については、鄭兒玉「台湾のキリスト教」呉利明ほか『アジア・キリスト教史1』（教文館、1981年）、及び五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相』（人文書院、2006年）、藤野陽平『台湾における民衆キリスト教の人類学』（風響社、2013年）等を参照した。

- 101 「台湾基督長老教会の受難 4」『福音と世界』第 35 卷第 10 号、1980 年 10 月、67 頁。
- 102 鄭兪玉、前掲論文、94 頁。
- 103 查時傑「四十年来の台湾基督教会」、林治平編『基督教與台湾』台北、基督教宇宙傳播中心、1996 年、166 頁。
- 104 五十嵐真子、前掲書、150 頁。
- 105 鄭兪玉、前掲論文、74 頁。
- 106 長老教会と台湾近現代史の關係、長老教会が台湾の近代化に寄与した意義については、藤野陽平、前掲書、鄭兪玉、前掲論文以外にも、「台湾基督長老教会について」（日本基督教団台湾關係委員会編『台湾基督長老教会の歴史と苦難』日本基督教団、1982 年）、及び陳南州『台湾基督長老教会の社会、政治倫理』（台北、永望文化、1991 年）等に詳しい。
- 107 「台湾基督長老教会の受難 2」『福音と世界』第 35 卷第 8 号、1980 年 8 月、57 頁。
- 108 「台湾基督長老教会対国是の声明與建議」『台湾教会公報』第 1076 号、1972 年 1 月、10 頁。
- 109 同上論文、10 頁。
- 110 高俊明「『国是声明與建議』在信仰上及神学上之動機」『台湾教会公報』第 1078 号、1972 年 3 月。
- 111 王崇堯「台湾处境化神学的發展——論 1970 年後台灣長老教会與台湾政治社会的互動——」『神学與教会』第 28 卷第 2 期、2003 年、366 頁。
- 112 「基督徒的政治責任」『台湾教会公報』第 1238 号、1975 年 11 月 23 日。
- 113 「我們的呼籲」『台湾教会公報』第 1230 号、1975 年 9 月 28 日。
- 114 岡部達味編『中国をめぐる國際環境』岩波書店、2001 年、127 頁。
- 115 「台湾基督長老教会人権宣言」『台湾教会公報』第 1329 号、1977 年 8 月 21 日。
- 116 薛化元『戦後台湾歴史閲覧』台北、五南図書、2010 年、240、268 頁。
- 117 李喬、前掲書『我的心靈簡史』、216 頁。
- 118 同上書、213 頁。
- 119 葉石濤「論李喬小説裡的『仏教意識』」、李喬、前掲書『李喬短篇小説全集資料彙編』、114 頁。なお、初出は『台湾文芸』第 57 期、1978 年 1 月である。
- 120 壹闡提「簡介『金剛經』」（『書評書目』第 1 期、1972 年 9 月）、及び壹闡提「淺談仏經讀法」（『書評書目』第 8 期、1973 年 11 月）。
- 121 紀野義一「李喬訳『真情人生——給拙於生活的人——』台北、文皇、1974 年。
- 122 李喬、前掲書『我的心靈簡史』、216-217 頁。なお、1970 年代の李喬作品に対するキリスト教の影響については、李喬自身も短篇「昨日水蛭」（1977 年）等にキリスト教の宗教的思想が表現されていると認めている（「心霊的尋索、文学的旨趣——文学大師の信仰對話：李喬與宋沢萊——」、「台湾教会公報新聞網」<http://www.tcn.org.tw/news-detail.php?nid=6831> 2014 年 12 月 31 日アクセス）。このように李喬文学におけるキリスト信仰の影響は無視できず、この問題については今後別稿にて検討したい。
- 123 李喬、前掲『文化、台湾文化、新国家』、337-339 頁、及び李喬「台湾文学與本土神学」、李喬『李喬文学文化論集 1』苗栗、苗栗県文化局、2007 年、161-162 頁。
- 124 李喬、前掲『我的心靈簡史』、215 頁。
- 125 台湾の王爺信仰については、三尾裕子「〈鬼〉から〈神〉へ——台湾漢人の王爺信仰について——」（『民族学研究』第 55 卷第 3 号、1990 年）等に詳しい。
- 126 康豹、前掲書、56-61 頁。
- 127 李能棋、前掲書、69-70 頁。
- 128 1970 年代における台湾人作家の創作態度の変化は、恐らく李喬だけに限定されるものではないだろう。1970 年代には、李喬以外の台湾人作家の創作では如何なる変化が現われたのか、当時の台湾文学は全体として如何に変容していったのか、こうした問題については今後別稿にて検討したい。
- 129 彭瑞金、前掲「読『結義西来庵』」。

(2014 年 10 月 18 日投稿受理、2015 年 2 月 9 日採用決定)

〔付記〕

本稿は、「日本台湾学会第 16 回学術大会」（2014 年 5 月 24 日、於東京大学）での報告をもとに加筆、修正したものです。報告時にはコメンテーターの三木直大先生をはじめ、多くの先生方から重要な御意見を多数頂戴しました。また、投稿後には査読者及び編集委員の諸先生方からも重要なコメントを頂戴しました。厚く御礼を申し上げます。